

戦争責任を取った十字架の将軍・今村均

前坂俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)



〔リベラルな陸軍軍人〕

昭和の陸軍軍人ほど評判の悪い連中はいない。無謀な戦争を引き起こしながら、戦争責任を取った者は少ない。その数少ない例外の一人が今村均である。

今年は東京裁判から六十年、戦争責任問題が今だにアジア外交をギクシャクさせている中で、十字架の将軍、今村均のリーダーシップ、生き方が注目される。



今村は明治十九年(一八八六)宮城県に生まれ、陸軍大学校(二十七期)を首席で卒業した。

年次では東候英機、板垣征四郎、永田鉄山らと同期、後輩であり、石原莞爾の二年先輩に当たる。計八年間におよぶ英国での駐在武官補生活が異色の経歴であり、リベラルな思考、国際性はここで養われたと思われる。

昭和六年(一九三一)の満州事変前に、今村は四十五歳で参謀本部作戦課長(当時大佐)の要職に就くが、満州での関東軍の突出に反対し、「中国の抗戦、米欧ソの反対で満州国の経営は困難になる」と主張して石原と激論。

事変後の林銑十郎朝鮮軍司令官の独断越境にも「絶対認めない」と反対したが、逆に“腰抜け”と批判され、半年で更迭された。

〔 巧妙な戦術と軍政〕

昭和十四年十一月、中国の南寧攻略作戦では十倍の兵力をはねのけ大勝利を収め、指揮官として大局的な判断力、戦術を示した。

昭和十六年十一月、第十六軍司令官としてインドネシアに上陸、九日間でオランダ軍、イギリス軍を無条件降伏させる。

そしてインドネシアをオランダの植民地支配から独立させる事を念頭に、軍政を施行した。

現地人に強制労働をさせず自由を与え、石油価格を大幅に値下げし、オランダ人にも国際法にのっとった対応をした。

軍中央からは「生ぬるい、もっと強圧的にやれ」との命令が下るが、今村はこれを拒絶して住民優遇、融和政策を続けた。

オランダによって投獄されていた独立運動の指導者スカルノ（後のインドネシア初代大統領）を釈放した際、今村はこう告げた。



「これから自由の身です。日本軍に協力するか、中立的立場をとるかはあなたの自由です。かりに日本軍に協力しなくても、私はあなたの生命と財産を完全に保証します」

スカルノは今村の公正無私な態度に感激し、日本軍政への協力を誓った。現在もインドネシアの対日感情がいいのは、今村のこうした軍政によるものである。

昭和十七年十一月、今村は第八方面軍司令官となり、ラバウルで指揮をとる。ここでは日本陸軍の伝統的な玉砕戦法を排して、徹底的に堅固な要塞を築いて、自給自足による持久戦法をとった。

約三百キロにわたる地下トンネルの要塞を築き、中には司令部、十カ所の病院、大砲や軍用トラック、弾薬の格納庫を設けた。

兵隊には銃よりも鍬をもたせて、イモや米、豆などの栽培による食糧増産を指導、鉄壁の要塞で米軍の攻撃から終戦まで持ちこたえ、約十万人の兵士を生きて帰国させた。

南方の戦場では戦闘での死傷者数よりも、餓死した日本兵の方が多数に上った現実をみると、今村の巧妙な作戦、知将ぶりが一層際立つ。

〔責任を取ったリーダー〕

今村の真骨頂を示したのは、戦後の態度である。東京裁判で「日本の将兵で処罰すべき者がいれば、私を裁け。部下は私の命令を実行したにすぎない」と主張、部下の無実を訴えて戦ったが、結局、禁固十年の判決を受けて巣鴨刑務所に収監された。

昭和二十三年五月ジャワの刑務所に移送されたが、部下たちがラバウルのマヌス島で過酷な炎暑、不衛生、食料欠乏のもとで刑に服していることを知ると「部下と同じ獄に服役して、その苦しみを自らのものとしたい」と再三にわたりGHQへ願い出て、昭和二十五年三月、赤道直下の最悪の環境のマヌス島刑務所に移送された。

今村六十四歳である。



マッカーサーは「日本に来て以来、初めて真の武士道に触れた思っていた」とその態度を絶賛した。

今村は昭和二十九年十一月に釈放されたが、以後は自宅に造ったわずか三畳の「謹慎小屋」にこもり、病身をひきずって部下の世話しながら、自伝の執筆活動に取り組んだ。

「戦争中、私は多くの部下を死地へ投じさせた身です。だから戦後は、生きているかぎり、部下への責任があるのです」というのが今村の信念であった。

今村は昭和四十三年、八十二歳で亡くなったが、今村は陸軍にあって稀有の武人であり、理の人であり、知の人であり、情の人であり、責任をとった真のリーダーであった。

転載禁止